Black Dogs 2

Kuroneko Saku

Black Dogs 2

黒ねこ作

登場人物一覧

【八倉 直人】ヤグラ ナオト

廃墟の東京でモグリの義術医を営む青年。
第四次大戦中は「暗殺者」と呼ばれる日本国防軍の特殊工作員だった。
顔無し事件を経たことで自身の復讐に決着をつけ、親友の死を乗り越えた。
事件後、レイヴンと友人以上恋人未満の曖昧な関係を保った同棲をしている。

【エルヴィ（エルヴィーネ・クレーフェルト）】

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の少女傭兵でドイツ人。
スパイ容疑で逮捕された両親の無実を証明するため、戦中は軍で狙撃兵をしていた。
本名が長いため、翡翠の付けた「エルヴィ」という愛称が通名となった。
頭の回転が早く日本語も堪能だが、常に防弾仕様のメイド服を着ている。

【レイヴン】

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』に所属する傭兵でフィリピン系の少女。
第四次大戦中は反中ゲリラを経て、日本国防軍に現地徴用された過去を持つ。
顔無し事件を機に家族の復讐を終え、今は直人を支えるために生きている。

【サーニャ】

レイヴンを慕って行動を共にする傭兵でロシア人の少女。
第四次大戦中に軍の洗脳処置を受け、精神年齢が六歳前後のまま止まっている。
純真で無邪気な性格や言動とは裏腹に罪悪感や善悪の基準がほとんどない。

【神近　梓】カミチカ　アズサ

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の女社長で「少佐」が通名の戦争中毒者。
日本国防軍時代に「走狗・走狗部隊」と呼ばれた第１１３特殊戦闘部隊を率いた。

【御堂 翡翠】ミドウ ヒスイ

第四次大戦中、スパイ容疑で投獄された父親の容疑を晴らすために軍へ志願した。
第１１３特殊戦闘部隊でエルヴィと組み、親友として共に戦った。
トラブルを解決する請負屋として独立後、半年前から行方不明になっている。

【ラルス・アルベルト】

『殺戮教団』の神父で、昔はカトリックの神父をしていた。
大戦中はドイツ軍所属の工作員を担うも、ある事件を機に罪の意識へ苛まれ始める。
エルヴィの両親とは友人関係にあり、エルヴィを娘のごとく可愛がっていた。

【六興 伊織】ムクミ イオリ

『殺戮教団』の信者で、大戦中は日本国防軍の軍人だった。
教団に薬物で洗脳され、教主を戦死した姉だと信じて従順に従っている。
自律兵器を自身の脳波で遠隔操作する特殊な技術を持つ義術機甲兵。

【ハーティ・エヴァレット】

『殺戮教団』の教主にして、大国の後ろ盾がある謎の女。
信者を薬物洗脳で操り、自爆攻撃も厭わない狂信者を作り出している。
人を操ることに長けており、他人を自らの道具としか見ていない外道。

【劉 宗一】リュウ・ソウイツ

中国マフィア『六笙商会』の社長にして『黒龍会』の若手武闘派幹部。
飄々とした性格の女好き。元殺し屋の愛人二名を護衛にしている。

【秋 一飛】シュウ・イーフェイ

『六笙商会』の副社長で劉と義兄弟の杯を交わした弟分。
武装警察の出身で劉の懐刀として仕えている。

【蘭華・蓮華】ランファ・リンファ

劉の愛人でボディガードの姉妹。姉が蘭華で妹が蓮華。
ハニートラップを専門とした殺し屋をしていたが、劉に拾われてから廃業した。

【習 文利】シュウ・ウェンリー

『六笙商会』の構成員にして劉の側近。元人民解放軍の優秀な兵士だった。

【馬 遼英】マ・リョウエイ

六笙商会の麻薬市場で売上を誤魔化したため、永久追放された麻薬の売人。
現在は抗争に巻き込まれて死亡したとされている。

【メリル・ギース】

ガールズバー『ブルースクエア』で店主と接客嬢を兼任するアメリカ人の美少女。
表裏がない性格で周囲に愛されているが、レイラしか知らない謎の過去を持つ。

【レイラ・キュイ】

『ブルースクエア』の美人バーメイドで、店の用心棒も担うロシア人の女性。
誰もが認める美貌の持ち主だが、基本は無口で無愛想。
メリルの過去を唯一知っており、彼女のためなら手段を選ばない覚悟を持つ。

【スミス・スターロン】

銃器や義術部品を加工しているアメリカ人で、直人の良き友人。
修理や改造の腕だけは確かなアメリカ陸軍の元兵士で無類の女好き。
メリルを目当てにブルースクエアへ通っている常連客。

〔義術医療〕（ぎじゅついりょう）

損失した患部を人工部品へ置き換える代替医療。「義術」と省略するのが一般的。
脳と脳幹を除く人体の九割を人工化させる全身義術化は俗にサイボーグ医療と呼ぶ。
外科医の八倉甚により開発され、多くの難病患者や傷痍軍人の治療へ貢献した。
義術化の施術や負傷箇所の修復などを行う専門医を義術医という。

〔特殊工作員〕（とくしゅこうさくいん）

軍情報部や参謀部に所属する非正規戦専門の工作員。
諜報活動、要人暗殺、破壊工作、敵地潜入など分隊規模か単独で作戦行動に当たる。
情報分析官のサポートを受け、諜報員と工作員の両方を兼ねて動く実動要員。
日本国防軍にしかない兵種であり、海外では準軍事担当官と呼ばれる。

〔自律兵器〕（じりつへいき）

第三次大戦で戦場の主役となった人工知能搭載型兵器のこと。
人間の脳をモデルとする人工知能を積んでいるが性能は実物に遠く及ばない。
戦車や航空機から人型ロボットにまで応用され、様々な無人兵器が生まれた。
義術の開発により、第四次大戦から戦場の支援機と位置づけられるようになった。

〔顔無し事件〕（かおなしじけん）〈Black Dogs〉

『顔無し』と呼ばれた日本新政府の工作員が『一〇一文書』奪取を画策した事件。
八倉直人の両親が隠匿した一〇一文書には、旧日本政府と第四次大戦の真相が書かれており、その内容を世に公表することで顔無しは新政府の転覆を目論んでいた。
しかし、非正規戦部隊の『亡霊部隊』とともに八倉直人の手で抹殺されている。
最終的に八倉直人と取引したロシアマフィア『ワルシャワゲート』が各種特権と引換えに日本新政府へ文書を引き渡すことで事件は終息した。

「宗教は大きな河に似ている。源泉から遠ざかるにつれて、絶え間なく汚染している」

小説家　アントワーヌ・フランソワ・プレヴォ・デグジル

プロローグ

黴臭い、淀んだ空気が満ちていた。

ラルス・アルベルトは無駄のない歩幅で廊下を足早に進む。

ところどころに雨水の浸食が目立つ、コンクリートが剥き出しの壁が続く廊下だった。天井で等間隔に並んだ蛍光灯の白光が、その無機質な冷たさを余計に際立たせた。

飾り気のない複数の鉄扉が両壁に見える。どれも錆止めが塗られただけの真っ黒な扉ばかりだ。ラルスの銀縁の四角眼鏡は刑務所じみた内装を淡々と映しては過ぎた。

わずかに皺の刻まれた浅黒い肌と彫りの深い目元、オールバックに固めた髪は色褪せたような灰色をしている。まだ四十代前半だが、その容貌は実年齢より老けて見えた。

ラルスには特徴が二つある。まずは優に一八〇センチはある身長だ。恐らく、見下ろされた者の大半が圧迫感を抱くことだろう。そのうえ、引締まった筋肉がついている。

次に聖職者の正装と言うべきカソックを着ていることだ。その上から黒のロングコートを羽織り、暗闇を抜け出た影のごとく全身を黒一色で覆い隠していた。

そのせいか両手へ填めた白手袋と胸元で揺れる銀のロザリオは、遠目に見ても判別できるほどわかりやすい。鈍い輝きを放つロザリオには深く抉ったような傷がある。

その時、突き当たりの鉄扉から獣じみた唸り声がした。そこへ金属の軋る音が加わり、肉を打つような鈍い音が響く。これが延々と陰鬱な雰囲気の廊下へ垂れ流されていた。

孔雀石のようなラルスの瞳は、鉄扉の前で直立した日本人の少女を見据える。ポニーテールにまとめた黒髪は濡れたような艶がある。彼女は濃緑の軍用ベレーを被っていた。

「翡翠。彼は何か喋ったか？」

御堂翡翠が首を横へ振った。ほっそりとした面立ちに凜とした表情を湛えている。

「付いて来い」

生真面目に頷く翡翠を連れ、重い扉を押し開ける。途端、血と汗の饐えた臭いを過分に吸った湿気が漏れ出した。二十人近くの男が狭い室内へ詰めている。

皆一様に白いローブを身につけ、ドブのような濁った瞳へ殺気を帯び、ぐるりと部屋の中心を囲んでいた。扉近くの男がラルスに気づいて声を張った。

「そこまでにしろ。ラルス神父がお見えになった」

男達は一斉に左右へ割れた。先ほどまであった無秩序な暴力の気配が消え、有無言わさぬ規律のような沈黙が室内を支配する。ラルスは翡翠と中心へ進み出た。

そこには全裸の若者がいた。手錠で両手両足を拘束され、天井のフックから鎖で床上数センチの高さに吊るされている。胸板や腹筋は内出血で濃い紫色の滲みを作っていた。

ラルスが感心したように観察して回る。若者の端整な顔は、鼻血や汗、涙などの体液に汚れ、蛍光灯の下で何度も肩を喘がせている。ラルスの口から失笑が漏れた。

「元人民解放軍の義術強化兵にしては頑丈だな。それとも君がタフなだけか？」

西暦二〇四二年現在、人間の体は脳と脳幹以外を人工部品へ置き換えられる。

一般にはサイボーグ医療として知られ、義術あるいは義術医療と呼ばれていた。

その義術医療で生み出された兵士が、義術強化兵と呼ばれる者達だ。義術強化兵の化学血液は人工赤血球の影響で赤くない。若者の鼻血は小豆のような赤銅色だった。

中国人の若者は切れた口端を吊り上げて笑う。

「無駄だ。いくら拷問したところで俺は何も喋らない」

「なら、嫌でも喋りたくなるようにしてやろう」

ラルスの両手が後ろ腰から棒を抜く。全長六〇センチの黒い棒。先端から二〇センチ、後ろ端から四〇センチにグリップが付いている。長さの足りない松葉杖のようだ。

若者が怪訝な顔つきで両目を眇めた。

「トンファーだと？」

瞬間、若者の右肋骨へ鋭い一撃が入る。特殊軽金属製の人工骨が単純な突きで呆気なく折れた。乾燥した薪を割るような音が鳴り、若者の絶叫が響き渡る。

ラルスは左のトンファーで反対側の肋骨も叩き潰した。若者が苦痛で呻き、咳き込んだ拍子に血を吐き出す。ラルスは頬に撥ねた飛沫へ目もくれず淡々と述べた。

「人間の肋骨は全部で二十四本。鎖骨の真下から腰骨の上までである」

「……それが……なんだ……」

「君なら一本や二本は平気だろう。だが、二十四本も折られたらどうなるかな？」

若者が顔を引き攣らせた。全身を義術化しているとはいえ、痛覚まで無くしたわけじゃない。体の受けたダメージは相応の痛みとして、最も脆弱な生身の脳へ伝えられる。

くるりとラルスが右トンファーのグリップを持ち替えた。ビリヤードのキューで若者を狙うように長棒の先端を向ける。当然、棒先が打つのは白い手球ではなく肋骨だ。

若者は唐突に左の第八肋骨を折られた。骨だけを破壊する一撃。折れた骨が周辺の筋肉と内臓を抉る感触は、小型爆弾が体内で爆ぜたような激痛を若者へ味合わせる。
ラルスは主へ祈りを捧げ、聖書を朗読する日課のような調子で若者の骨を壊し続けた。左右のトンファーで殴られるたび、若者は楽器のごとく音程の違う悲鳴を上げる。
ラルスが二十四本目に右の第一肋骨を圧し折ったとき、若者の意識は朦朧としており、すでに手錠と鎖が擦れる音しか聞こえなかった。
「……なるほど。習文利。君の覚悟だけは確かなようだ」
トンファーをしまい、コートのポケットからボールペンのような圧式注射器を出した。これから行なわれることを悟り、習は血でぬめった唇を微かに動かす。
「……やめろ……」
ラルスは無言でペン先に似たキャップを親指で弾き、若者の右腕を掴むなり静脈へ押し当てる。プシュと空気が抜けるような音を残し、透明の液体が数秒で流し込まれた。
空の容器を放り捨て、習の腕を無造作に離す。
「君は快楽に身を委ねればいい。あとには安らかな眠りが待っているだろう」
「……下地獄、病狂的混蛋」
地獄に落ちろ、イカレ野郎。上海訛りの中国語が擦れ声で吐き捨てる。
ラルスは翡翠を従え、習の憎悪に満ちた視線を背へ受けながら退出した。
「翡翠。情報を引き出した習文利を返して来い。首だけでいい。劉宗一に首だけを返してやるんだ。事務所の破壊も忘れるな」
人間らしさが欠落した瞳へ仄暗い色を帯び、翡翠は静かに頷いた。

第一章

1

――義術により脳以外を人工化した人類が当たり前となった時代。世界的な都市の大半が瓦礫と廃墟に変わっても、そこから人々の営みが消えてなくなることはなかった。

エルヴィは文庫本を片手に、はたきで事務所を軽く掃除していた。ぽんぽんと応接用のソファーやテーブルの埃を落とす。ＢＧＭは点けっぱなしのラジオ放送だ。

「この十八年間に人類は二度の世界大戦を起こしました」

左手の親指が器用にページを捲る。橋本紡の『半分の月がのぼる空』だ。給湯室の戸棚をはたく間もラジオは勝手に喋り続けていた。

「第三次大戦は核と自律兵器の戦争でした。各国が資源とエネルギーを奪い合い、米露が小諸国の併合で砲火を交えました」

これはライトノベルという若者向けの小説であり、エルヴィのお気に入りだった。

「第四次大戦は義術の戦争でした。兵士が機械の肉体を持ち、東アジアを主戦場にした総力戦です。同時に、卑劣な敵国へ我が国が正義を突きつける戦争でもありました」

日本が過去に世界へ誇った娯楽文化の一端には、ライトノベルもあったという。

「あの大戦で我々日本人は多くを失っています。東京を始めとした都市の大半が焼かれ、総人口の三分の一が無残な死を遂げました。そうした悲劇を繰り返さないためにも、我々は強い日本の復興を急がなくてはならないのです」

また一ページ捲り、古い漫画誌やら煙草の箱が雑然と積まれたL字デスクへ向かう。

「再び強い日本を取り戻そう！　平和で豊かな社会を実現する政党、自由国民政党です。日本新政府広報が午前九時をお知らせします」

ポーンという時報を合図に、机の端へ載せたラジオの電源を切った。カバーの隙間へ差した栞を挟んで本を閉じる。背伸びをした拍子に「んっ」と艶っぽい声が漏れた。

エルヴィはフレンチタイプのメイド服を着ており、透き通るような銀髪を肩上ぐらいでハーフカットに切り揃えている。鮮やかな碧眼に呆れを湛え、デスクを睨んだ。

「まったくもう。少佐殿は片付けもしないで……」

戦中、エルヴィは旧日本国防軍の軍人だった。第１１３特殊戦闘部隊に所属し、激戦と死地を潜り抜けて来た。部隊指揮官の名は神近梓――旧国防軍の元少佐だ。

今の神近は傭兵派遣会社ブラックドッグズの社長である。危険な仕事も金しだいで引き受け、どこの誰だろうが金を払うなら加勢する。それがブラックドッグズの流儀だ。

エルヴィも会社所属の傭兵であり、公私ともに神近の補佐をしている。

神近は高い戦闘センスを持つ戦争中毒者だ。禁煙とタダ働きが死ぬほど嫌いで、気持ち良ければ性別を問わないバイセクシャル。そして、家事炊事が壊滅的にできない。

それでも、エルヴィは彼女を強く信頼している。私生活は確かにロクでもない。だが、神近が寵愛してくれたからこそ、今の自分はここで本を楽しむことができる。

雑誌と漫画誌は分別して重ねる。吸殻はゴミ箱へ。灰皿はまとめて給湯室の流しで水洗い。コーヒーの染みが目立つカップも一緒だ。テキパキと机の掃除をこなす。

ちょっかいを出してくる神近も一週間はいない。遠方の仕事が入ったらしく、最近スカウトした旧知の大男、久間迅蜂と昨日から旧大阪府へ出張に出ていた。

その間、事務所の留守を預かるのが今週の仕事であった。とはいえ、やるべき業務は昨日中に全部終わってしまったので、神近が帰るまでは休暇のようなものだ。

応接ソファーへ寝転び、続きを読もうと本を開く。エルヴィの両親はドイツ人で、生まれはドイツのブリュッセルだった。とはいえ、ドイツで過ごした時間は少ない。

何故なら、両親は在日ドイツ大使館の駐在武官だったからだ。幼年期から日本国内で暮らし、日本語の会話や読み書きを学んでいた。もちろん、ドイツ語と英語もできる。

昔、語学の勉強は面倒で嫌いだった。ただ、こうして日本の娯楽を自然に楽しめることを思えば「やっておいて良かった」と粘り強く教えてくれた亡き両親に感謝している。

両親も日本の文化が好きだった。母は工芸品や食べ物を好み、父はゲームやアニメなどの娯楽を好んだ。そう考えると自分の嗜好は父に似たのかもしれない。

紙の栞を指で摘んだとき、社屋の前でエンジン音がした。複数の足音と命令を飛ばすような声が聞こえ、戦車装甲と同じ複合装甲板の玄関ドアが激しく叩かれる。

デスクへ本を置き、事務所から玄関ホールへ向かう。

ブラックドッグズの社屋は元ラブホテルの廃墟を改造した建物だ。受付カウンターを横切り、ドア下の左右にある鍵を開け、右扉を引き開けた。

「すみません。今日は――」

と、言い切る前に、チャイナドレスの女二人が重傷の男を支えつつ運び込む。さらに続々と負傷者が運ばれ、壁際へ寝かされていく。エルヴィがハッとして慌てた。
「ちょ、ちょっと待ってください！　勝手に怪我人を入れられても困ります！」
「悪いねえ。血で汚れた床は掃除させるから許してくれ」
エルヴィの振り向いた先に二人の男がいる。一人はダークスーツとサングラス。もう一人は鋭い目つきが特徴で、野戦服じみたカーゴパンツとジャケットを着ていた。
鋭い目つきの男が硬い英語で尋ねた。
「あの少佐はいるか？　仕事を頼みたい」
「今は遠方に出ています。仕事の話はお聞きすることしかできません」
男が詰め寄り、エルヴィの肩を強く掴んだ。
「喫緊の問題なんだ！」
「ですから――」
「いいから連絡を入れて呼び戻せ！　見合うだけの報酬は払う！」
さらに力を込めて握られ、エルヴィが小さく声を上げる。
サングラスの男が「そこまでにしろ。秋」と肩から手を退かせた。
「すまないな、メイドちゃん。ちょっと派手にやられちまったから気が立ってるんだ。悪気はない。許してやってくれ」
「……わかりました。ですが、少佐殿は」
「とりあえず、神近に連絡を入れてくれ。それから腕の良い義術医を頼む」
エルヴィは休暇の短さに溜息をつき、サングラスの男へ渋々頷いた。

2

八倉直人は腕の甲で額の汗を拭う。羽織っていた炭素繊維のジャケットは脱ぎ、水色のシャツも袖を捲り上げてあった。冬間近の季節ですら集中する施術中は汗だくだ。

「人工筋肉、換装完了。人工神経の接続……良し」

手には医療用の白いゴム手袋を着け、ピンセットで突き刺さる破片や不純物を取り除いていく。大小様々な鉄片が赤銅色の血で濡れたまま受け皿へ載せられた。

これは義術医療の施術だ。「換装」と「修復」の二種類に施術は大別され、今行なっている施術は修復に当たる。破損した義術化部位の交換や修理が主な内容だった。

直人の仕事は義術医だ。義術化した人々を診る専門医であり、ある意味で各医療分野を網羅した人体のプロである。ただし、直人は免許を持っていないモグリの義術医だ。

しかし、その腕が高いことは街でもよく知られていた。おかげで、廃墟の東京を牛耳るマフィアや武装組織から毎日のように依頼がくる。今日の施術も急遽入った仕事だ。

患者は東スラブ系アラビア人で三十歳の男だ。負傷箇所は右大腿部の銃創。体内に残る7・62ミリ弾を摘出後、傷口から入り込んだ瓦礫の砕片を除去する。

それを壁際で見守るのは、スラブ系ロシア人の若い女と幼い兄妹だ。三人は男の家族であり、女は妻、兄妹は子供であった。三人の視線は不安と恐怖に揺れている。

当然、「不安」は夫あるいは父親の容態に対する感情だ。一方、「恐怖」は室内ではなく外へ向けられている。銃声が断続的に響き、爆発の衝撃で壁が嫌な音を立てて軋む。

男が搾り出すような声で促した。

「……もういい、ドクター。ここから逃げてくれ……」
「あんたは自分の体力と家族のことだけ心配してろ」
「あいつらは精鋭のムジャヒディンだ……すぐ全員、殺られちまう……」
ムジャヒディンとはイスラム武装組織に属する民兵のことだ。ジハードへ参戦する戦士を意味しており、ほとんどのイスラムゲリラは自身をそう呼称する。
この男もＩＲＭＡことイスラム解放機構軍のムジャヒディンであり、イスラム教のシーア派の属していた。ちなみに襲撃者もシーア派だが、男とは分派が違うらしい。
イスラム教徒の宗派争いは底なしの泥沼に似ている。コーランの解釈、指導者を意味するイマームの選定、他宗教や国家、民族の排斥など、ジハードの火種は事欠かない。
恐らく、ムジャヒディンは数百年後も戦い続けているだろう。だが、一般のイスラム教徒には迷惑な話だ。イスラム教＝危険という誤解が広まるほど肩身は狭くなる。
直人は傷口を塞ぐ準備をしながら男を励ました。
「安心しろ。ここを守ってるヤツらは百人のムジャヒディンより強い」
「ふざけないでくれ。俺達は女子供にやられたりしない」
どうも例えが良くなかったらしい。直人は器具を手に胸中で辟易とする。彼らのプライドもわかるが今は面倒だ。全身麻酔にすればよかった、と密かに後悔していた。
「いいから口を閉じて寝てろ。患部を閉復する」
患部の鉗子を外し、皮膚が重なる隙間へ細い注射器で特殊樹脂を注入した。馴染ませるように指で圧しながら樹脂を浮かせ、希釈した溶剤を塗布したヘラで均等に削る。

義術医療に縫合はない。人工皮膚と同化する特殊樹脂を使って患部を塞ぐのだ。この作業が下手だと傷口が開いたり、皮膚の劣化が早まってしまう。

直人が三十分ほどで削り終え、ヘラを下げて深々と息をついた。

「接着終わり。施術終了」

女が安堵の息を吐き、兄妹が床にへたり込む。男はベッドから上体を起こし、壁に立て掛けておいた自動小銃を引き寄せる。カラシニコフことＡＫ‐４７自動小銃だ。

ぎょっとした直人が慌てて止めた。

「お、おいおい！　今終わったばっかりで何やってんだ！」

「ドクターには感謝してる。あとは俺達の問題だ」

「馬鹿言うな！　あと三十分は麻酔が抜けないんだぞ！」

「引金が引ければいい。ドクター達は早く逃げろ」

気づけば女もカラシニコフを持ち、十二歳にも満たない兄妹まで、小さな体格と不釣合いな短機関銃を抱えている。誰もが死ぬ覚悟を決めたような目をしていた。

直人は呆れよりも怒りを覚えた。この夫婦は別にいい。己の意思で銃を取り、戦うこと選んだのだ。だが、この兄妹は違う。自分で銃を握る選択をしたんじゃない。

二人は親や周囲の影響で銃を構えている。当然、拒否権などなかっただろう。

生まれたときから、それが正しいと教え込まれるのだ。しかも、本人達は親の教えを疑うことも知らず、大人となり子を成したとき、自身の子にも同じことを行う。

人間の無知と文化、歴史が宗教を生んだ反面、身勝手な欲望やエゴイズムが宗教を都合の良い道具へ変えた。最後は紛争やテロのイデオロギーに神と教義は使われる。

それらの洗礼を子供達や若者が受け、大人の掲げた大義名分の下に銃を取り、誰かを殺して自らも殺される。直人は人類の産んだ忌むべき悪習は宗教だと思っていた。
消毒剤を入れた水桶で施術器具を洗いつつ説得した。
「いいから安静にしてろ。だいたい、さっきも言ったじゃないか。ここの護衛は強い」
「だから、俺達は――」
突然、部屋のドアが蹴り開けられた。シュマグ（ストールのような麻布）を顔へ巻いた男が乱入してくる。その手には使い込まれたＡＫ‐４７自動小銃があった。
血走った双眸が直人や一家を見据えて叫ぶ。
「アッラーフ・アクバルッ！（アッラーは偉大なりッ！）」
直後、シュマグ男の左側頭部が爆ぜた。肉片と砕けたゼリー状の眼球を飛び散らせる。銃弾の貫けた反対側から血と脳漿を噴出させ、片足で半回転しながら崩れ落ちた。
どうやら、アッラーはシュマグ男をあっさり見捨てたらしい。男と家族三人が唖然とした顔で死体を凝視する。直人は器具を拭きながら両肩を竦めて見せた。
「ほらな。言った通りだろ？」
レイヴンがドアロでピエトロベレッタ社製のベレッタＭ９３Ｒを両手に一丁ずつ握っている。彼女の愛用する自動拳銃であり、マシンピストルと呼ばれる類だ。
「ナオト。こっちは終わった」
彼女は乱雑に刈ったような短い黒髪と綺麗な褐色肌をしている。直人と同い年の二十一歳で、出身は東南アジア。豹のような猫科じみた目つきで死体を見下ろした。

気づけば銃声も爆発も止んでいる。何人いたのかは知らないが全滅に違いない。これで安全に帰れそうだ、と直人がトランクケースへ器具やゴミを片付けて蓋を閉める。

「お疲れさん。こっちも終わりだ。ところで、サーニャは？」

レイヴンの背からひょこっと小さな頭が覗いた。

「お兄ちゃん、呼んだー？」

サーニャは七歳年下のロシア人だ。身長一四〇センチの小柄な体格に、あどけなさを残した童顔。サファイアのような青い瞳をしており、セミロングの金髪だった。

レイヴンは濃緑の野戦服を着ているが、彼女は猫耳付きフードの黒いパーカーにモスグリーンのカットパンツという格好だ。黒のハイニーソックスが白い太股を隠している。

その小さな手で握るのは、ウルティマックス１００軽機関銃だ。Ｍｋ５仕様の取り回しが利く短銃身モデルだから、銃身は短くストックも切り詰めてある。

二人とも兵派遣会社『ブラックドッグズ』所属の傭兵であり、旧日本国防陸軍の元軍人だった。しかも、家族を戦火に奪われ、義術強化兵となった戦災孤児でもある。

サーニャは特に悲惨だ。戦中、旧国防軍で「記憶洗浄」という洗脳処置を施されたせいで、肉体は十四歳なのに精神年齢が六歳で止まったままな後遺症を負っている。

レイヴンは彼女の保護者であり、姉のような存在だ。

男の妻と子供達に見送られ、直人は二人を連れて部屋を後にした。ここは半壊した大型マンションの十階。共用廊下はムジャヒディンの死体で溢れている。

その階下へ広がる瓦礫の荒野には、半壊状態のビル群が墓標のごとく聳え、散発的な銃声が聞こえる。秋の乾燥した風に黒煙が揺れ、いくつも狼煙のように昇っていた。

これが日本の首都だった東京だ。中国、南北朝鮮軍による無差別都市攻撃は、日本人口の約三分の一を死へ追いやった。後に一〇一事変と呼ばれる大戦の引金だった。

第四次大戦中、日本は首都を宮城県仙台市へ移行した。アメリカの軍事的支援を受け、中国、南北朝鮮軍との全面戦争に突入する。戦火は伝染病のごとく世界中へ広がった。

第四次大戦に勝者はいない。疲弊した世界と瓦礫の都市群だけが、身を削るような総力戦の果てに残ったものだ。とはいえ、これは日本に限った話じゃない。

大国のアメリカとロシアですら、今は痩せ細った野良犬のような有様だ。

戦後、日本新政府は首都を据え置き、被害の少ない東北六県以外を切り捨てた。流入難民規制法案を作り、閉鎖政策を行うことで国家基盤を維持している。

世界中の国家が似たような政策を実施していた。入国できなかった戦災難民は放棄された都市へ集まり、暴力と欲望が渦巻く無法地帯で日々を生きている。

東京もマフィアや軍人崩れの武装組織が、旧二十四区を目安に支配圏争いを繰り広げていた。麻薬売買や売春も当たり前だ。支配者が違えば善悪や倫理の定義は変わる。

そんな現代のソドムとゴモラは無数にある。しかし、硫黄の炎で焼かれた街はない。そのかわり、銃弾と対戦車ロケット弾の大雨で火の海と化した街は山ほどあった。

「ナオト？　聞いてる？」

耳元で唐突に声が聞こえ、直人は思考から意識を呼び戻された。

「……悪い。何か言ってたのか？」

レイヴンはむっとした表情で左腕へ抱きついた。野戦服の上からでもわかるほど豊満な胸を押しつける。直人は柔らかな感触に焦り、彼女の上目遣いから顔を逸らした。

「せ、せめて、帰ってからにしろよ……」
「なんで？」とレイヴン。顔にはありありと「嫌だ。離れないぞ」と書いてある。
直人の脳がフル回転で苦し紛れの理由を捻り出した。
「……あー、ほら！　まだ生きてるヤツがいるかもしれない！」
「ちゃんと止めを刺してる。ね？」
サーニャが「うん！」と笑顔で無慈悲な援護射撃を加えた。
どうしたものか、と直人が困り顔で頬を掻く。二人は数ヶ月前の「顔無し事件」以来、診療所を兼ねた直人の自宅に居候していた。小さな家族のような共同生活である。
レイヴンは直人の理解者であり親友だ。だが、それ以上の関係へ踏み込んでいることもお互い理解している。今は親友以上恋人未満という曖昧な付き合い方をしていた。
レイヴンは悪戯っぽい笑みを浮かべてからかう。
「ナオトはおっぱいに弱い。添い寝してるときも見てる」
「ばっ、馬鹿っ！　ちょうど視点がそこになるってだけだよ……」
「見たいなら素直に言えばいいのに」
「そういう問題じゃないんだよ。色々とな」
レイヴンが心配そうに眉尻を下げ、すっと顔を近づけた。
「まだ、あのこと気にしてるの？」
「……顔無し事件でケリがついたとは思ってないよ」
顔無し事件は二人に復讐の日々を終わらせる一夜の闘争だった。だが、裏に潜んでいる元凶を倒したわけじゃない。第四次大戦と一〇一事件を画策した敵が残っている。

「あのクソ野郎……八倉甚がどこに消えたのか……」
八倉甚は義術を生み出した天才外科医にして血の繋がった直人の祖父だ。
戦前から最も安全な場所にいたはずの男は、終戦間際に忽然と姿を消した。行方はおろか生死すら不明。一切の痕跡を残さずして天才は消息を断ったのである。
男には疑惑と償わせるべき大罪がある。私利私欲のために、数多の命を奪った罪だ。八倉甚を裁かない限り、彼女の気持ちへ応える資格はない。直人はそう考えていた。
真剣な顔つきで言葉を選びながら話した。
「……そもそも、自分の気持ちに整理がついてないんだ。その証拠に、お前の優しさに甘えて依存してる。だから、いずれは答えを出さなきゃいけない……」
レイヴンは小さく首を振り、労わるように微笑んだ。
「ゆっくりでいい。今の関係も好きだから」
そう言うと直人の頬へキスをした。彼女は母親のような包容力と我侭な子供っぽさを併せ持っている。それが純粋な強さであり、直人を思いやる優しさとなっていた。
レイヴンの頭を撫でようとしたとき、視界の右端で動く人影を捉えた。彼女を庇うように後ろへ押しやり、その右脇からベレッタ一丁を拝借する。
男が折り重なった死体の裏から跳んだ。直人の銃口が火を噴く。男の右眼が発砲炎を捉える前に破裂した。後頭部から血と脳漿を飛沫かせ、躓くように前のめりで頽れる。
戦中、直人は旧国防軍の特務機関で、数々の軍事工作や暗殺任務へ従事した。自動拳銃を油断なく構え、「暗殺者」と恐れられた元特殊工作員の冷徹な貌で近づいた。

うつ伏せに倒れた男の後頭部と首の境目を狙う。そこには脳幹がある。脳幹は知覚や呼吸などの生命維持と密接に関わっている。ここを破壊すれば動く心配はない。

即死のはずだが念のために一発撃ち込む。男の体がわずかに痙攣して沈黙した。

「……義術強化兵は脳か脳幹を確実に破壊するんだ。じゃないと今みたいに死んだと思ってたヤツに殺られる。止めを刺すなら確実に殺れ。わかったな？」

二人が怯え顔でぶんぶんと首を縦へ振る。直人はその頭を撫でた。

「わかれば良し。それじゃ、朝飯に行こう。腹が減って死にそうだ」

突然、尻ポケットから着信が響いた。小型の軍用多目的端末を引っ張り出す。

直人は少し前まで端末を持っていなかった。昔の端末は情報部の追跡を考え、軍を逃亡する際に処分したからだ。これは神近から連絡用に貰った端末である。

ブラックドッグズは名の通った傭兵派遣会社だ。ナイフを銜えた黒いシベリアンハスキーの部隊章を見れば、大抵の組織が死を覚悟するという噂まであるらしい。

レイヴンが肩横から「誰？　少佐？」と画面を覗き込む。

「いや、エルヴィだ。何かあったのかな？」

ちなみに直人の副業は傭兵だ。顔無し事件の際、神近との取引で傭兵にならざる負えなかったのだ。大抵、人手が足らないかロクでもない仕事が入ると連絡がくる。

衛星電話を繋いだ途端、エルヴィの切羽詰った声が鼓膜を突いた。

『すみません、八倉殿！　すぐ施術道具を持って来てください！　急いで！』

Black Dogs 2

発行日
2015 年 12 月 30 日 コミックマーケット 89

発行者　よろづ屋本舗
http://yorodukatudousi.dou-jin.com
yoroduyahonpo@gmail.com

著者名　黒ねこ作(@gretelproject)
https://twitter.com/gretelproject

イラスト 山田サトシ
編集　黒ねこ作

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。

YORODUYA HONPO
Illustration Satoshi Yamada
http://satoshiart.html.xdomain.jp/index.html